

現代中国語における“A+得+C”に関する一考察

謝 平

1. はじめに

現代中国語の“A+得+C”形式¹の補語の部分には、例(1a)のように一語からなる場合もあれば、例(1b)のようにフレーズからなる場合もある。

(1) a. 他高兴得很。(→很/非常高兴)

[彼はとても嬉しい。]

b. 他高兴得跳了起来。

[彼は嬉しくて跳び上がった。]

例(1a)のように一語からなる補語には“很”以外にも、“慌、不得了、了不得、要命、要死、够呛、吓人、不行”などが挙げられる(刘月华1983, 张谊生2001等)。これらの補語は“很、非常”などの程度状語に置き換えることができ、専ら程度が高いことを表すことから、先行研究では程度補語として見なされている。一方、例(1b)のようなフレーズからなる補語が程度補語として扱われるか否かについては、研究者によって意見が分かれる。例えば、徐国玉(1999)はこれを程度補語として認めているが、² 刘月华等(1983)では“表示

¹ 本稿は“形容詞(Adjective)+得+補語(Complement)” (以下“A+得+C”と記す)について考察する。工藤(1983)では程度副詞を「形容詞の程度を限定しつつ、陳述的には肯定の平叙の文に用いられるものである」と定義している。本稿では工藤の定義を参考にし、“A+得+C”形式を次のように限定する。

(i)形容詞(Adjective)は肯定的であり、状態性の意味を持つ語である。

(ii)補語(Complement)は状態性の意味を持つ語(形容詞)にかかり、その程度を表す。

したがって、次の例のような“A+得+C”形式は、本稿では考察の対象外とする。

a. 她不高兴得很。[彼女は大変機嫌が悪そうだ。]

b. 别高兴得太早了。[喜ぶのはまだはやすぎる。]

² 徐国玉(1999:11)では“黑得要命”、“单纯得像水一样”のような“得”を伴う補語になる語句について、語句自身の意味から言えば状態を表すが、“得”を伴う補語と述語の間の意味関係から言えば、

謝 平

程度的情态补语”に分類され、³ また、朱德熙(1982)では“状态补语”として扱われている。このように、“得”を伴う補語を分類することは容易ではない。刘勋宁(2006)は“得字补语”とそれ以外の補語との違いについて、次のように述べている。

“得”字之后的部分可以不断延长, 这在其他几种补语里是看不到的, 结果补语、程度补语只能是一个词, 可能补语和趋向补语虽然比一个词长一点儿, 但也只是增加一个成分而已。

[“得”に後置する部分はいくらでも長くすることができるが、これはほかの補語には見られない現象である。結果補語、程度補語は一語でなければならず、可能補語と方向補語は一語より少し長い、せいぜい成分が一つ増えるだけである。]

(刘勋宁2006:199-200, 下線と日本語訳は引用者による)

刘勋宁(2006)によれば、程度補語は一語でなければならず、したがって、いくらでも長くすることのできる“得”を伴う補語は程度補語としてみなされないことになる。しかし、形容詞に後置する補語が例(1b)のようにフレーズからなる場合、程度性はまったく含意されないのであろうか。また、一語からなる補語とフレーズからなる補語にはそれぞれどのような特徴があるのだろうか。本稿では意味的、統語的観点から、形容詞に後置する“得”を伴う補語表現について分類し、各類の意味特徴を明らかにする。

2. “A+得+C”の分類及び程度性の特徴

既述のように、形容詞述語に後置するフレーズからなる補語表現に対する扱いについて、研究者によってばらつきが生じる原因として、このような補語表現が果たして程度を表わすものであるのか、それとも状態を表わすものであるのかという点が曖昧であることが挙げられる。『現代中国語総説』(2004:302)では“热得出汗”を例として、次のように述べている。

ただ現実には程度と状態は常に厳密に区別ができるというわけではない。例えば、“热得出汗”は「汗がでるほどまで暑くなった」という暑さの程度を表しているとも取れ

“得”を伴う補語はみな程度を表すと指摘している。

³刘月华等(1983)では、“表示程度的情态补语”として、“得很、得慌、得多、得不得了、得了不得、得要死、得要命、得不行、得可以”のような補語を挙げている。

るし、「汗がでるほど暑い」という暑さの状態を表しているとも取ることができる。

確かに、フレーズからなる補語は具体的な動作が表される場合が多く、動作性、描写性が強くなる。しかしながら、まったく程度性を表さないというわけではない。例えば、“高兴得跳了起来”という表現における“跳了起来”[跳び上がった]という動作は、“高兴”[嬉しい]という感情が高ぶった時に起こり得る行動である。つまり、この「跳び上がる」という動作が実際に引き起こされたという事実から、「嬉しい」という感情の程度が高いことが推測されることになる。したがって、“高兴得跳了起来”には“非常高兴”というニュアンスも含意されるといえよう。また、刘勋宁(2006)の指摘するように、“得”に後置する補語部分はいくらでも長くすることが可能である。

- (2) 气得我把他叫来, 又把左邻右舍都叫来, 当着众人的面, 细数了我们这些年的过从关系, 揭他当面是人、背后是鬼的底, 让大伙儿狠狠地训了他一顿。

(刘勋宁2006)

[腹が立って、彼を呼びつけ、また近所も呼んできて、皆の前で、ここ数年の彼の付き合いを事細かに説明し、彼が人前では人間であるが、裏では鬼だということ进行明かして、皆に彼を厳しく叱ってもらった。]

例(2)の場合についても、“把他叫来, ……让大伙儿狠狠地训了他一顿”という一連の行動から“我”の怒りが頂点に達していることが推測でき、例(2)に“非常气”というニュアンスが含意されていることは明らかである。したがって、例(2)のような“A+得+C”形式も程度を表す表現の一種であるといえよう。それでは、例(2)のような表現と“气得很”[とても怒る]、“气得要命”[非常に怒る]などの表現にはどのような相違点があるのだろうか。まず、“A+得+很”、“A+得+要命”などの表現の例について見てみる。

- (3) a. 我也伤心得很呐。(→很/非常伤心)
 [私もとても悲しかったよ。]
 b. 可怜的母亲伤心得要命。(→很/非常伤心)
 [可哀相な母は非常に悲しそうだった。]
 c. 他也会伤心得不得了。(→很/非常伤心)
 [彼もきっと非常に悲しむでしょう。]

例(3a)~(3c)のような場合、“A+得+C”の表す内容は“程度状語+A”形式と意味的に大差がないため、“伤心得很”、“伤心得要命”、“伤心得不得了”はいずれも“很伤心”、

謝 平

“非常伤心”に置き換えることができる(()内に→で示す)。しかし、例(3a)～(3c)と異なり、例(4a)～(4c)のように“程度状語+A”形式に置き換えると、補語の部分の具体的な内容を表せず、意味がずれてしまう場合もある。

- (4) a. 男孩子伤心得快哭出来了。(→[△]很/非常伤心)⁴
[男の子は悲しくて、泣き出しそうだった。]
b. 他再也控制不住感情，伤心得说不下去了。(→[△]很/非常伤心)
[彼はそれ以上感情を抑えることができなくなり、悲しくて話が続けられなくなった。]
c. 伤心得连钢笔都捏不住。(→[△]很/非常伤心)
[悲しくてペンを握ることさえもできない。]

例(4a)～(4c)の“A+得+C”部分はいずれも“非常伤心”の意味を含意するが、例(3a)～(3c)と異なり、“非常伤心”に置き換えると、“伤心”の程度をイメージ化する“快哭出来了”、“说不下去了”、“连钢笔都捏不住”などの具体的な状態を表すことができなくなる。例(3a)～(3c)の補語部分と例(4a)～(4c)の補語部分には、それぞれどのような特徴があるのだろうか。

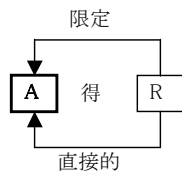
- (4) a. 男孩子伤心得快哭出来了。 [再掲]
(5) a. 男孩子(因为)伤心，快哭出来了。[男の子は悲しくて、泣き出しそうだった。]
b. 男孩子快哭出来了。[男の子は泣き出しそうだった。]

例(4a)の補語部分“快哭出来了”は、形容詞述語“伤心”の程度が高いときに表れる動作であり、直接形容詞述語の程度を限定するというわけではない。そのため、例(4a)は(5a)のように複文にすることが可能であり、また、例(5b)のように形容詞述語を省いても文として成立する。つまり、例(4a)～(4c)の場合、補語部分の表す内容は形容詞述語によって引き起こされる結果であると考えることができ、この場合、後件となる補語部分の表す内容が文の中心となっている。しかし、例(3a)～(3c)のような場合、補語部分は状語と似たような限定機能があり、形容詞述語の程度を強める強意的表現であると考えられ、例(4a)～(4c)の補語のように、形容詞述語と切り離して複文にすることや、形容詞述語を省いた状態で文として成立させることはできない(例(6b))。

⁴ 本稿では、文法的には正しい表現であるが、原文の意味を表しきれない表現に“[△]”をつける。

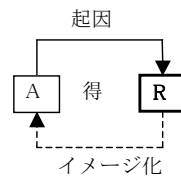
- (3) b. 可憐的母亲伤心得要命。 [再掲]
 (6) a. *可憐的母亲(因为)伤心, 要命。
 b. *可憐的母亲要命。

このように、“A+得+C”の補語部分の表す程度性は補語の性質によって異なる。つまり、“A+得+C”形式は形容詞述語と補語部分の関係によって、次のような二つのタイプに分類することが可能である。まず一つ目は、例(3a)～(3c)の表現のように、補語部分により形容詞述語が直接高い程度であることを限定し、副詞に似た役割を果たすようなタイプである(図1参照)。本稿ではこれを「副詞性類」と名づける。そしてもう一つは、例(4a)～(4c)のように、補語部分が形容詞述語の高い程度を具体化、イメージ化し、間接的に形容詞述語の程度を表し、形容詞述語が補語部分を引き起こす要因となっているようなタイプである(図2参照)。本稿ではこれを「具体性類」と呼ぶ。



例：可憐的母亲伤心得要命。

図1 副詞性類



例：男孩子伤心得快哭出来了。

図2 具体性類

副詞性類の補語部分は“很、不得了、了不得、要命、要死、够呛、厉害/利害、不行、慌”などのように一語から構成される場合が多いが、必ずしも一語からなるというわけではない。

- (7) a. 全村人忙得一塌糊涂。(→很/非常忙)[村人は皆めちゃくちゃ忙しかった。]
 b. *全村人(因为)忙, 一塌糊涂。
 (8) a. 我悲伤得无以复加。(→很/非常悲伤)[私はこれ以上なく悲しかった。]
 b. *我(因为)悲伤, 无以复加。

例(7a)の“一塌糊涂”と例(8a)の“无以复加”は四字熟語であり、両者ともフレーズからなる補語である。例(7a)、(8a)の場合、「めちゃくちゃである」、「これ以上甚だしいものはな

謝 平

い」という元々の意味は若干残っているものの、例(7b)、(8b)のように形容詞述語と切り離すことができず、直接的に“忙”、“悲伤”の程度が高いことを表している。また、次の例のような補語も一語ではない。

- (9) a. 每一次比赛胜过时间, 我就快乐得不知道怎么形容。(→很/非常快乐)
[時間との戦いに勝つ度に、私はどう表現したらいいか分からないほど嬉しかった。]
b. *每一次比赛胜过时间, 我就(因为)快乐, 不知道怎么形容。
- (10) a. 贺明的家普通得不能再普通。(→很/非常普通)
[賀明の家はこれ以上ないほど普通である。]
b. *贺明的家(因为)普通, 不能再普通。

例(9a)の補語部分はフレーズであるが、直接的に形容詞述語“快乐”[嬉しい]の程度を表しており、形容詞述語との関係は緊密である。したがって、例(9b)のように形容詞述語を省略すると、文として成り立たなくなる。同様に、例(10a)の補語部分は“不能再+A”からなるフレーズであるが、述語“普通”の程度が「これ以上ないほど」であることを限定しているため、この場合についても「副詞性類」に分類されると考えられる。

また、次の例のように、複文にしても文として成立するが(例(11b))、原文(11a)の意味と差異が生ずるような例も見られる。

- (11) a. 有一天, 异方在后台突然昏倒了, 他面色苍白得吓人, ……
(→很/非常苍白)
[ある日、異方は突然楽屋で倒れた。彼の顔色は恐ろしいほど真っ青だった。]
b. #有一天, 异方在后台突然昏倒了, (因为)他面色苍白, 很吓人,⁵
[ある日、異方は突然楽屋で倒れた。彼は顔色が真っ青で、恐ろしかった。]

例(11a)については、“苍白得吓人”の“苍白”が文の述語であり、話し手の焦点が置かれる部分になる。この場合の補語“吓人”は「恐ろしい」というもとの意味も若干残ってはいるが、“苍白”に後置され、主に“苍白”の程度が高いことを表している。このように本来の意味が弱まって慣用化し、専ら高い程度を限定する働きする表現としては、“吓人”

⁵ 本稿では、文法的には正しい表現であるが、原文の意味と異なる文には“#”をつける。

以外にも“够呛[たまらない]、惊人[驚かせる]、发慌[あわてる]、发昏[気を失う]”などが挙げられる。

3. 「副詞性類」及び「具体性類」の下位分類

3.1 「副詞性類」の下位分類

既述のように、「副詞性類」の補語は「具体性類」と異なり、意味的には程度副詞に置き換えることができる。

- (12) 昨晚他高兴得很。(→很/非常高兴)
[昨日の夜、彼はとても嬉しそうだった。]
- (13) 小伙子长得很帅，服饰动作都潇洒得可以。(→很/非常潇洒)
[若者はとてもハンサムだ。服装や振る舞いもとても格好いい。]
- (14) 我快乐得不得了。(→很/非常快乐)
[私は楽しくてたまらない。]
- (15) 昨夜突围时出汗多，感到渴得慌。(→很/非常渴)
[昨日の夜、突破したときいっぱい汗をかいたので、喉が渴いてたまらなかった。]

例(12)～(15)のように“高兴得很”、“潇洒得可以”、“快乐得不得了”、“渴得慌”はいずれも“很/非常+A”形式に置き換えることができる。しかし、张谊生(2001)による分類⁶にもあるように、例(12)の補語“很”と例(13)、(14)、(15)の補語“可以、不得了、慌”には大きな違いがある。张谊生(2001)による分類は統語的側面からによるものであるが、意味的側面から見た場合にも、両者には明確な差異が認められる。つまり、例(12)の“很”[とても]はもともと程度を表す虚詞であり、実質的な概念を持たないのに対し、“可以”[してもよい/まずまずよろしい]、“不得了”[大変だ]、“慌”[あわてる]は実詞的な成分からなり、より具体的な概念を持つという違いがある。したがって、「副詞性類」については、虚詞

⁶ 张谊生(2001: 136-138)は程度を表す補語になることができる副詞のうち、“很、极、死”のように状語と補語の両方を担うことができる副詞を“可补副词”とし、“慌、透、坏、绝伦、透顶”などのような補語にしか入れないものを“唯补副词”として分類している。また、“要命、要死、不行、不成、邪乎、吓人、够呛、可以、不得了、了不得”などについても“唯补副词”として認められつつあると指摘している。

謝 平

的成分の“很”と“要命、慌”などの実詞的成分の二類に分けることが可能である。

また、虚詞的成分からなる程度補語は“很”のみであり、“可以、不得了、慌”などのような実詞的な概念を持つ成分からなるものが圧倒的に多い。例えば、“了不得[大変だ]、要命[命を取る]、要死[死ななければならない]、不行[いけない]、异常[異常]、厉害/厉害[凄い]、惊人[驚かせる]、吓人[恐ろしい]、发慌[あわてる]、发昏[気を失う]、无法形容[言葉で表現できない]、无以复加[これ以上甚だしいものはない]、一塌糊涂[めちゃくちゃである]”などが挙げられる。

(16) 周炳困得发慌, 也就答应去了。(→很/非常困)

[周炳は暇でたまらなくて、行くと承知した。]

(17) 我的腿痛得厉害, 寸步难行。(→很/非常厉害)

[私の足は痛くてたまらない。一步も歩けない。]

さらに、実詞的な補語成分からなる「副詞性類」には、以上の例のような短い補語だけでなく、次の例(18)、(19)の補語“不知道怎么形容[言葉で表現できないほど]、不能再A[これ以上ないほど]”などのような比較的長いフレーズの場合もある。

(18) 对灵珊来说, 这是个奇异的夜晚, 奇异得不能再奇异, ……

(→很奇异/非常奇异)

[靈珊にとって、あれは不思議な夜だった。これ以上ないほど不思議だった…]

(19) 一到雪天的傍晚, 那酒馆就美得无法形容。(→很美/非常美)

[雪が降る日の夕方になると、あの居酒屋は言葉で表現できないほど美しい。]

例(18)、例(19)の補語“不能再奇异”[これ以上不思議なものはない]、“无法形容”[言葉で表現できないほど]は、形容詞“奇异”[不思議]、“美”[美しい]に後置し、もともとの意味も残ってはいるものの、主に“奇异”、“美”の程度が頂点に達することを表している。これらのフレーズは後述する「具体性類」と異なり、具体的な動作や結果状態などを伴わないことがその特徴であるといえる。

以上のように、「副詞性類」については虚詞的成分の“很”と実詞的成分の“要命、慌”などの二類に分類することが可能である。実詞的成分は一語の場合もあれば、フレーズの場合もあり、多種多様であるが、“不得了、了不得、不行、无法形容、无以复加”などのように否定を含む表現、或いは“要命、要死、够呛、一塌糊涂、慌、发慌、发昏”などのようにマイナスの表現であるというような意味的な共通点が見られる。また、これらの表

現はもともと極端な状態或いは心情を表しており、その本来の意味に「大変、これ以上ない」というようなムード的性格をもっている。

3.2 「具体性類」の下位分類

「具体性類」の補語は、形容詞述語の部分との関係が「副詞性類」の補語ほど緊密ではなく、その形容詞述語の程度を限定することはできない。「具体性類」補語の役割は形容詞述語の高い程度をイメージ化することにある。高い程度を含意する形容詞述語を具体化する手段としては、次のような「写実的表現」がよく用いられる。

(20) 杨洛书患了严重的胃病, 1.70米的身体瘦得只剩下40公斤。

[楊洛書はひどい胃病を患い、170センチの身体は痩せて、40キロまで落ちこんだ。]

(21) 母亲当时坐在水缸边, 玉兰和哥哥坐在门坎上, 从不落泪的母亲, 一时伤心得说不出一句话, 只是掉泪。

[当時、母は水がめのそばに座り、玉蘭と兄は敷居に座っていた。これまで泣いたことのない母は、悲しくてしばらく一言の言葉も出ず、ただ涙を流していた。]

例(20)は痩せた結果、体重が40キロしかないという事実が述べられている。また、例(21)も母が悲しむ様子が「言葉も出ず、ただ涙を流している」という具体的な動作を伴い描写されている。例(20)、(21)のように現実をありのまま描写しているような補語を、本稿では「写実的表現」と呼ぶことにする。

一方、次の例(22)の補語“像是春天的蔷薇”、例(23)の補語“如同玻璃”には、比喩的表現が用いられている。このような補語は常に“像”[みたいだ]、“如”[~のようだ]などのような類似性を表す指標を伴う。本稿ではこれを「比喩的表現」と名づける。

(22) 柔软的皮鞋也不知用什么硝红的, 红得像是春天的蔷薇。

[やわらかい革の靴は何を使ってなめして赤くなったのか分からないが、赤くて春のバラのようだった。]

(23) 脆得如同玻璃, 一碰就碎。

[脆くて、まるでガラスのようであり、触るとすぐに割れてしまう。]

また、例(24)の補語“心都要跳出来了”は「心臓が飛び出そうだ」という誇張的な表現

謝 平

により、形容詞述語“紧张”の程度が高いことがイメージされる。同様に、例(25)は“连…也/都”構文を用いて、程度が高いときに起こり得る出来事の中から最も極端な例を取り上げ、“害怕”の程度が高いことを大げさに表現している。本稿ではこれらの表現を「誇張的表現」と呼ぶ。

(24) 我们紧张得心都要跳出来了。

[私たちは心臓が飛び出るほど緊張していた。]

(25) 那是她第一次走上讲台，害怕得连粉笔都忘了拿。

[あれは彼女が初めて教壇に立ったときだった。怖くてチョークを取ることさえ忘れてしまった。]

以上のように、「具体性類」補語は補語部分の意味的性質により、「写実的表現」、「比喩的表現」、「誇張的表現」の三類に分類することができる。「写実的表現」とは実際に起こったことをありのままに述べる表現を指す。また、「比喩的表現」は常に“像”、“如”などの類似性を表す指標を伴う表現であり、「誇張的表現」は極端なケースを取り上げ、誇張的な表現で程度の高いことを表す表現である。これらの表現には、それぞれどのような特徴があるのだろうか。以下、「具体性類」の各類の意味特徴についてさらに詳しく分析していく。

3.2.1 写実的表現の結果性

写実的補語成分が表す事柄は、現実を実現することができること或いは実際に起こったことを表す。

(26) 那天晚上，我高兴得一夜没睡。[あの夜、私は嬉しくて一晩中眠れなかった。]

→那天晚上，我(因为)高兴，一夜没睡。

(27) 我高兴得跳了起来。[私は嬉しくて跳び上がった。]

→我(因为)高兴，跳了起来。

例(26)の“高兴得一夜没睡”と例(27)の“高兴得跳了起来”は実際に「一晩中眠れなかった」、「跳び上がった」という行動が実現されたことを表している。例(26)は「あまりにも嬉しすぎて、その結果、一晩中眠れなかった」という意味を表し、例(27)は「とても嬉しくて、跳び上がった」という意味を表している。“跳了起来”や“一夜没睡”などの現象は「嬉し

い」という感情の程度が高いとき起こり得る結果である。その結果に一般性があることから、述語“高兴”の程度が高いことが容易に推測される。したがって、例(26)、(27)における形容詞述語と補語には因果関係或いは順接関係があると考えられる。さらに、次の例(28)のように、文の中心が補語部分にある場合もある。

- (28) 昨晚他高兴得到半夜两点才睡着。 (作例)
[昨日の夜、彼は嬉しくて、夜中の二時になってようやく寝ついた。]

例(28)は“睡着”の状況について「あまりにも嬉すぎて、その結果、夜中の二時になってようやく寝ついた」のように詳しく述べている。つまり、述語“高兴”は補語部分の表す結果を引き起こす要因として述べられている。「写実的表現」の補語部分の情報がより詳細で、具体的であるほど、話し手は補語の部分に焦点を置き、補語の部分は文の中心的役割を担うようになるといえよう。

このように、“A+得+C”形式の補語部分に「写実的表現」が用いられる場合、ほかの場合に比べ、因果関係を表す傾向が強い。つまり、形容詞述語は補語の表す結果や状態の要因となる。また、その結果となる補語は形容詞述語の程度を具体化している。したがって、「写実的表現」は「結果性」という特徴を持つ表現であるといえよう。

3.2.2 比喩的表現の類似性

“A+得+C”形式の補語部分は比喩的表現が用いられる場合、常に“像、如、如同、犹如、似、好似、像/跟……似的、像/跟……一样”[～のように/みたいに]などのような比喩指標を伴う。

- (29) 钟期荣心情沉重得似一块石头。[鍾期榮は心が石のように重い。]

例(29)は「心が重い」ことを具体化するため、「重たい」という点において類似性のある「石」を用いて、“心情沉重”の状態をイメージ化している。川端(2002:43)は日本語の比喩表現の特徴について、あくまでも状態同士が比較され、程度の高さを表すことがあっても様態修飾の性質が強いと指摘している。現代中国語において比喩表現が用いられる場合も同様である。

- (30) 昔日那个即使是被打昏在地也仍虎死雄风在的伯父，已经瘦得如同一把干柴。

謝 平

[昔殴られて意識不明になっても威厳を失わなかった伯父さんは、既に薪のように痩せてしまった。]

例(30)の補語“如同一把干柴”は痩せた伯父さんの様子を描写している。“干柴”は痩せた伯父さんと類似性があり、「痩せた」イメージがより鮮明に呈示される。このように、「類比的表現」は類似性のあるイメージ自体に形容詞述語の程度が含まれており、その述語の程度をイメージ化させ、間接的にその程度の高さを表している。

3.2.3 誇張的表現の極端性

誇張的補語成分は「写実的表現」と同じく動詞フレーズからなる場合が多い。しかし、「写実的表現」類の補語部分は現実に行われた具体的な動作や事実を述べるのに対し、「誇張的表現」はその動詞フレーズが誇張的で、現実では実現しないこと或いは極端な事柄を表す。

- (31) a. 宋真宗高兴得简直要跳起来。[宋真宗は跳びあがるほど嬉しかった。]
b. 孩子们都高兴得跳了起来, …… [子どもたちは嬉しくて跳び上がった。]

例(31a)の補語“简直要跳起来”の場合、実際には「跳びあがる」という動作は行われておらず、「嬉しい」程度が頂点に達する場合に起こり得る極端な動作を取り上げ、誇張的に“高兴”の程度が高いことを表す「誇張的表現」であるのに対して、例(31b)の補語“跳了起来”は実際に「跳び上がった」ことを表す「写実的表現」である。

また、例(31a)のような動作“跳起来”は現実には実現可能であるが、「誇張的表現」においては一般に現実では実現不可能な極端な表現が用いられることが多い。

- (32) 从解放初期的初级社社长, 到后来的生产队长, 为乡亲们的温饱操劳了一辈子, 此时瘦得只剩下一把骨头。
[解放初期の初級社の責任者、後の生産隊リーダーは村人のために一生苦労した。当時痩せて骨だけになっていた。]

例(32)は「骨だけになる」というような現実では実現不可能な極端な表現を用いて、“瘦”の程度が高いことを具体化している。

このように、「誇張的表現」は極端な例を取り上げて、形容詞述語の程度を具体化しており、極端性を持っているといえよう。また、「副詞性類」の“要死”[死ななければなら

ない]、“要命”[命を取る]は、特にマイナスの意味を表す形容詞(ex.“痛苦得要死”、“冷得要命”など)と共に起する場合、誇張的なニュアンスが含まれることから「誇張的表現」に近いともいえるが、この場合、形容詞述語が文の中心となる。しかし、「誇張的表現」は形容詞述語に後置する場合、補語部分が文の中心となることから、両者には根本的な違いがあるといえる。

- (33) a. 夏天热得要命, 汗流浹背的, 没法漂亮。
 [夏はとても暑い。びしょりと汗をかいて、おしやれすることができない。]
 b. *夏天(因为)热, 要命, ……
- (34) a. 他非但不会生气, 反而高兴得要命。[彼は怒るところか、嬉しくてたまらなかつた。]
 b. *……反而(因为)高兴, 要命。
- (35) a. 十二月的悉尼热得简直要人的命。 (Google)
 [十二月のシドニーは死にそうなほど暑い。]
 b. 十二月的悉尼(因为)热, 简直要人的命。
 [十二月のシドニーは暑くて、死にそうだ。]

例(33a)、(34a)の補語“要命”と例(35a)の補語“简直要人的命”は同じような意味を表すように思われるが、両者の機能は異なる。例(33a)、(34a)のように、「たまらないほど」という程度の高さを表す“要命”は形容詞述語“热”、“高兴”に依存しており、例(33b)、(34b)のように形容詞述語から切り離すことができない。しかし、「誇張的表現」「简直要人的命”が用いられる例(35a)は例(35b)のように言い換えることができる。この場合の“简直要人的命”は「命が取られるほど/死にそうなほど」という極端なケースを取り上げ、十二月のシドニーの暑さをイメージさせている。

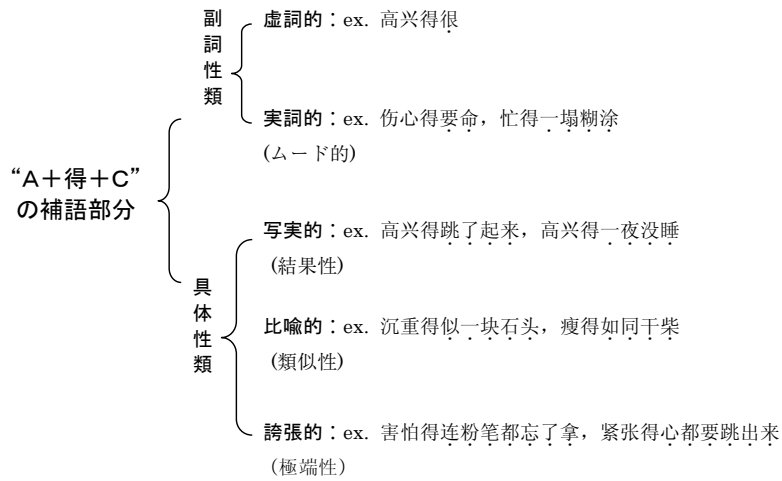
以上の分析のように、「誇張的表現」は極端な例で程度の高さを表しており、極端性が高いことがその特徴であると考えられる。

4. おわりに

以上、現代中国語における“A+得+C”の機能と特徴について考察した。“A+得+C”は補語Cの機能によって、「副詞性類」と「具体性類」の二つに分類することができる。「副詞性類」は直接的に述語Aの程度を限定するのに対し、「具体性類」は述語Aの程

謝 平

度が高いことを具体的な状態や結果をもってイメージ化しており、間接的に形容詞述語の程度を表す。このように「具体性類」にも程度が含意されることから、“A+得+C”形式を程度表現と見なすべきであることを指摘した。また、本稿ではさらに「副詞性類」と「具体性類」をそれぞれ下位分類し、“A+得+C”各類の意味特徴を詳しく分析した。まとめると次のように示すことができる。



「副詞性類」補語は一語からなる場合が多いが、フレーズからなる場合もある。また、「副詞性類」において補語部分が虚詞からなる表現は“很”のみであり、実詞によって構成される表現が圧倒的に多い。実詞的表現には、“不得了、了不得、不行”などのような否定的性格、或いは“要命、要死、够呛”などのようなマイナス的性格を持つ表現が多く、もともとの意味としてムード的な性格を持っていることがその特徴として挙げられる。一方、「具体性類」補語は意味的性質により「写实的表現」、「比喻的表現」、「誇張的表現」の三つに分類することができる。「写实的表現」は現実をありのままに描写しており、強い結果性をもつという特徴が見られ、「比喻的表現」には類似性という特徴が見られる。また、「誇張的表現」には極端なケースを取り上げ、形容詞形容詞述語の程度をイメージさせ、具体化するという特徴が見られる。その中には“高兴得要跳起来”の“要跳起来”のように実現可能であるが、実際には実現に至っていないケース、“紧张得心都要跳出来”の“心都要跳出来”のような実現不可能なケース、さらに“害怕得连粉笔都忘了拿”

の“连粉笔都忘了拿”のように最も極端な例を取り上げるケースがある。

主要参考文献

- 刘月华等(1983) 《实用现代汉语语法》 外语教学与研究出版社
刘勋宁(2006) <“得”的性质及其后所带成分>『中国語の補語』白帝社
吕叔湘主编(1984)《现代汉语八百词》 商务印书馆
王俊毅(1996) <形容词带“得”字补语的考察>《延安大学学报》(哲学社会科学版)第2期
赵日新(2001) <形容词带程度补语结构的分析>《语言教学与研究》第6期
张谊生(2001)《现代汉语副词研究》 学林出版社
朱德熙(1982)《语法讲义》 商务印书馆
川端元子(2002)「程度副詞相当句(節)「Pほど」について」『日本語教育』114号
工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
徐国玉(1999)「中国語の“得”を伴う補語の分類」『東アジア研究』(大阪経済法科大学アジア研究所)第24号
松岡栄志・古川裕監訳(2004)『現代中国語総説』(北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編)三省堂

中国語例文出典

北京大学汉语语言研究中心 CCL 语料库

